鳴門教育大学研究紀要
第36巻　2021

戦後小学校国語教科書における説明的文章教材の変遷

―― 昭和46年度から平成31年度を対象として ――

幾　田　伸　司

（キーワード：小学校国語教科書，説明的文章，題材）

1．はじめに

本稿の目的は，小学校国語教科書における説明的文章教材の採録状況の傾向を明らかにすることである。国語科における「読むこと」の学習において，説明的文章教材は，物語教材とともに柱とされている教材ジャンルである。学習指導要領上でも「説明」「報告」「記録」「解説」などが例示されており，これらは，教科書においても「説明文」として区分され，採録されている。

説明的文章教材にあたる教材は，明治期に刊行された国定教科書から採録されている。しかし，その採録史についての研究は，他ジャンルの教材史研究に比べて，多く蓄積されていない。その理由として，説明的文章を判定するための基準が曖昧であり，教材調査が難しかったことが挙げられる。たとえば「言語事項についての解説」や事実に取材した「事実物語」を説明的文章と見なすかは教科書によって異なる場合があり，教材収集にあたって判断が難しかった。また，説明的文章は複数の教科書で重複採録されることがほとんどなく，同一筆者による教材も少ない。そのため，採録傾向を分析しにくかったことも，研究の蓄積がなされなかった一因であろう。

とはいえ，説明的文章が国語科学習において重視されてきたことは確かであり，どのような文章を児童が読んできたか，その史的変遷を記述することは，国語科教材史研究において，不可欠な課題であると考える。そこで本稿では，昭和46年度から平成31年度まで使用された小学校国語教科書に採録された説明的文章の教材調査を行い，どのような題材が取り上げられてきたかという観点から，採録傾向を考察する。たしかに，説明的文章の学習では，文章構成や論理展開，記述のあり方など，述べ方とそこに表れる論理的思考を捉えることが指導事項であり，題材自体は直接の学習内容ではない。一方で，学習者は教材で述べられたことを読み，その内容について学び考えることで，自身の価値観や考え方を培っていく。説明的文章の学習を通して学ばれるそうした隠れた学習内容を明らかにすることで，国語科教育がどのような情報や価値観を児童に与えてきたかの一端を明らかにすることも，本稿のねらいである。

2．調査の対象と方法

本稿の考察にあたっては，昭和46～平成31年度に使用された国語科検定教科書に採録された説明的文章を収集し，教材目録を作成した。「説明的文章」について，森田信義は次のように定義している*1。

> 説明的文章は，書き手が，事象（ものごと）の本質を，論理的な認識方法によってとらえ，とらえたものを論理的に表現することによって生み出される文章を基本とする。文学以外の文章群の呼称である説明的文章の中には，多種多様な文章があるので，論理的認識の文章という性格の希薄なもの（実用的文章，生活的な文章と言われるもの）が存在することは否定できないが，国語科の教材として，説明的文章の中心的位置を占めるのは，論理的認識の文章であると規定して差し支えないだろう。また，実用的，生活的文章の場合も，程度の差はあっても，基本的には論理的認識に支えられているということもできる。

森田の指摘するとおり，「文学以外の文章群」を「説明的文章」と見なせば，単元における学習活動の指示や説明，言語事項のコラムなども，説明的文章に分類されることになる。しかし，「読むこと」の学習に用いられる教材であることを重視するならば，「論理的認識」に基づいて叙述されていることが説明的文章の必須条件であることは確かである。そこで本稿でも，森田の定義による「論理的認識の文章」であることを，説明的文章を

収集する際の基準として採用した。説明的文章の下位ジャンルには，「説明文」「記録文」「報道文」「報告文」「解説文」「論説文」などがある。本調査では，教科書においてこれらの文種に分類されていることを説明的文章の具体的な判断材料とした。これらをふまえ，以下の基準に基づいて「説明的文章」教材を判定し，収集した。

⑴ 目次などに「説明文」「論説文」「記録文」「報道文」というジャンル表記がある教材。採録にあたって一度でもこれらのジャンルに分類されたことがある教材は，他の版の教科書でジャンル表記がなくても説明的文章と見なした。なお，「報告文」「解説文」は「読むこと」の教材としては採録されていないため，説明的文章に入れなかった。

⑵ 目次などにジャンル表記がない場合は，個々の教材本文にあたり，他の説明文教材と比較しながら，次の観点に沿って論者が判断した。

ア 「読むこと」の学習のためにおかれ，事象を説明したり読者を納得させたりするという目的・文体で書かれている文章。教科書に記述された「指導目標」「学習の手引き」などを参照した。

イ 一年生用上巻に採録された教材の中で，「問い－応答」の形式，「〇〇は△△です。」といった説明形式を備えた文章。

ウ 言語事項に関わる知識を説明する教材は，ジャンル表記がなければ，原則として説明的文章と見なしていない。ただし，筆者名が明記され，知識の説明とともに筆者の言語に対する捉え方が示されている教材は，説明的文章とした。

⑶ 改訂の際に教材本文の加筆や削除，字句の修正などが行われている場合でも，叙述内容に大きな変更がなければ同一教材と見なした。また，題名の変更がある場合でも本文記述が一定量以上共通していれば同一教材とした。

⑷ 複数学年で採録された教材５編は同一教材と見なしている。ただし，学年ごとに集計する場合は，これらを別教材として扱った。

調査期間の起点は昭和46年とした。小学校教科書の編修様式について学校図書刊行教科書を検討した幾田は，昭和46年版から編修様式に変化が見られ，教材中心の単元編成になったことを報告している。それにともない，この時期から目次などでも教材ジャンルが明示されるようになっている。本稿の調査では，各教材を説明的文章と判定するための基準の一つを教科書のジャンル表記に求めているため，教材ジャンルが明示されるようになった昭和46年を起点とした。

調査対象としたのは，昭和46年度から平成31年度までの49年間に刊行された小学校国語科教科書７社75種である。調査対象とした教科書の概要を【表１】に示す。【表１】では，準拠する学習指導要領に対応させて全体を５期に分けている。また，それぞれの教科書が使用された年数と各期の総年数も記載している[*2]。

【表１ 昭和46年度から平成31年度の間に刊行された小学校国語科教科書】

指導要領に基づく期		S46期			S55期				H４期			H14期		H23期	
各期の総年数		９年			12年				10年			９年		９年	
教科書刊行年度		S46	S49	S52	S55	S58	S61	H１	H４	H８	H12	H14	H17	H23	H27
教科書の使用年数		3	3	3	3	3	3	3	4	4	2	3	6	4	5
出版社	日本書籍	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	■	■	■
	東京書籍	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	大阪書籍	■	■	■	■	■	■	○	○	○	○	○	○*	■	■
	学校図書	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	三省堂	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	○	○
	教育出版	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	光村図書	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	5	5	5
		15			21				18			11		10	

＊大書 H17版は，H21・22年度は日本文教出版より刊行された。

これらの教科書に採録された全教材について教材目録を作成し，上記の基準に沿って説明的文章教材と見なすかを判定した。

3．説明的文章教材の採録数

収集した説明的文章教材は795編で，延べ1926回の採録があった。各年度に採録された教材数と教科書一種（六学年）あたりの平均採録回数，学年ごとの採録数と一社あたりの平均採録回数は【表２】に示す通りである[*3]。

【表２　説明的文章教材の採録回数】

		S46	S49	S52	S55	S58	S61	H１	H４	H８	H12	H14	H17	H23	H27	総採録回数
全体	採録数	151	157	151	133	135	143	171	165	149	137	114	102	105	113	1926
	平均	30.2	31.4	30.2	26.6	27	28.6	28.5	27.5	24.8	22.8	19	20.4	21	22.6	
学年別	一年	20	20	20	18	18	19	22	20	20	20	18	15	17	19	266
	平均	4	4	4	3.6	3.6	3.8	3.7	3.3	3.3	3.3	3	3	3.4	3.8	
	二年	23	21	22	20	20	24	28	25	22	22	19	18	17	21	302
	平均	4.6	4.2	4.4	4	4	4.8	4.7	4.2	3.7	3.7	3.2	3.6	3.4	4.2	
	三年	24	25	25	22	24	26	29	24	21	22	19	16	18	18	313
	平均	4.8	5	5	4.4	4.8	5.2	4.8	4	3.5	3.7	3.2	3.2	3.6	3.6	
	四年	26	29	27	23	24	24	31	31	25	24	21	19	18	19	341
	平均	5.2	5.8	5.4	4.6	4.8	4.8	5.2	5.2	4.2	4	3.5	3.8	3.6	3.8	
	五年	26	30	27	24	25	24	29	30	30	23	18	17	17	18	338
	平均	5.2	6	5.4	4.8	5	4.8	4.8	5	5	3.8	3	3.4	3.4	3.6	
	六年	32	32	30	26	24	26	32	35	31	26	19	17	18	18	366
	平均	6.4	6.4	6	5.2	4.8	5.2	5.3	5.8	5.2	4.3	3.2	3.4	3.6	3.6	
刊行教科書数		5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	5	5	5	

説明的文章の採録では，様々な要因によって採録数が変動する。たとえば，文量が少ない教材を複数採録したり，複数教材を組み合わせるセット単元を設定していたりすれば採録数が増える。また，言語事項について説明した文章を説明的文章として扱うかどうかでも採録数は異なる。このように教材数は教科書の編修方針に左右されるため，各年度の採録数を単純には比較できないが，およその採録傾向は見とれると考える。

平均採録数を見ると，S46期からS55期の間では全般的に漸減傾向と言える。ところが，H４期では教材減が進み，特にH８版からの減少割合が大きい。H４版と比べると，H14版では一種あたり8.5編，一学年当たりにすると1.4編減っている。教科書のスリム化に伴う教材精選の傾向は，平成以降に特に厳しくなっている。ただし，H17版から教材数は漸増に転じており，現状では一学年３～４編の採録数で安定している。

学年別の平均採録数についてS46版とH27版を比べると，一・二年では減少の幅が0.2, 0.4編と相対的に小さく，三～五年で1.2～1.6編程度，六年では2.8編となっている。教材の精選は中学年以上で進み，特に六年生教材に顕著に表れている。とはいえ，H27年版の教材採録数自体は，3.6～4.2編の幅に収まっていて全学年同程度である。昭和期は高学年になるほど「読むこと」に学習の重点が移っていたものが，近年では全学年で様々な言語活動を伴う学習が均等に実施されるようになったと推測できる。

4．継続採録年数

【表３】は，各教材が採録された年数を集計し，採録期間の長さによって整理したものである。考察にあたって，採録年数の幅を次のように設定した。なお，本稿はS46年を調査の起点としたため，それ以前の採録状況については触れていない。したがって，S46版より前から採録があった教材でも最長採録期間は49年としている。

２～８年：採録回数が２回以下で，一つの期（最短で９年間）の途中で差し替えられた教材。

９～18年：採録回数が２～６回で，およそ二期に渡って採録された教材。

19～27年：採録回数が４～８回で，二から三期に渡って採録された教材。

28年以上：採録回数が７回以上で，三期以上にわたって採録された教材。

【表３】によると，800編中503編（全体の62.9%）が，２～８年の間に差し替えられた短期教材であった。森田信義は「教科書改訂のたびに，説明的文章教材は，しばしば大幅な入れ替えを余儀なくされる。「ことがら・内容」が鮮度を失ったことへの配慮と見られる場合も多い」[*4]と指摘しているが，調査対象を増やしても，森田

【表３　採録年数別にみた説明的文章教材数】

	一年	二年	三年	四年	五年	六年	計
２～８年	53(55.8%)	78(64.5%)	74(60.2%)	86(60.1%)	92(62.6%)	120(70.2%)	503(62.9%)
９～18年	32(33.7%)	33(27.3%)	39(31.7%)	50(35.0%)	45(30.6%)	42(24.6%)	241(30.1%)
19～27年	5(5.3%)	5(4.1%)	3(2.4%)	6(4.2%)	7(4.8%)	8(4.7%)	34(4.3%)
28年以上	5(5.3%)	5(4.1%)	7(5.7%)	1(0.7%)	3(2.0%)	1(0.6%)	22(2.8%)
	95	121	123	143	147	171	800*

＊複数学年での採録があった５編は別教材として扱ったため，総数が800編となっている。

の指摘通り，説明的文章教材が短期で差し替えられる状況が確認できた。学年ごとにみると，一年の短期教材の比率は55.8％で相対的に少ないが，二年以上では60％をこえ，特に六年は70％が短期教材であった。高学年では，環境問題など社会的状況を踏まえた題材について論じる文章が増えてくる。学習者を取り巻く社会状況が変容する中で，説明的文章の題材については，同時代の社会的関心も踏まえながら，ことがら・内容の「鮮度」を保とうとしている。

【表４】は，28年以上に渡って採録されている長期採録教材の一覧である。長期教材は22編で，すべて同じ教科書での継続採録である。四〇年を超えて採録が継続している10編はすべてH27版でも採録されており，今後も継続が続く可能性が高い。これらは一年３編，二年４編，三年２編，四年１編で，五・六年に採録された教材はなかった。【表４】に挙げた教材22編の学年別内訳をみても，一年５編，二年５編，三年７編，四年１編，五年３編，六年１編で，やはり長期教材はほぼ低学教材年に偏り，高学年教材は長期採録されにくいという傾向が顕著である。出版社別に見ると，教出・光村・東書は１～３年に長期教材が１編以上ある，【表２】で示したように，H27版の各学年の一社あたりの平均採録数は3.6～4.2編であり，この３社ではそのうち１編以上で，評価が安定した長期教材を採録している。題材を見ると，動植物について述べた教材が22編中10編あり，理科的内容を重視する教材の傾向は，時代を超えて一貫している。

【表４　長期採録教材一覧】

	学年	教材名	筆者	初出	終出	継続年
学校図書	3	あいずとしるし		S46	継続	49
教育出版	1	はたらくじどう車		S46	継続	49
教育出版	2	さけが大きくなるまで		S46	継続	49
光村図書	2	たんぽぽのちえ	植村利夫	S46	継続	49
光村図書	3	ありの行列	大滝哲也	S49	継続	46
光村図書	1	じどう車のなかま／じどう車くらべ		S52	継続	43
東京書籍	2	たんぽぽ	平山和子	S55	継続	40
東京書籍	2	ビーバーの大工事／ビーバーのす作り	中川志郎	S55	継続	40
教育出版	4	花を見つける手がかり	吉原順平	S55	継続	40
光村図書	1	どうぶつの赤ちゃん	増井光子	S55	継続	40
東京書籍	3	自然のかくし絵	矢島稔	S61	継続	34
光村図書	6	外来語と日本文化		S46	H16	34
教育出版	2	きつつき		H１	継続	31
学校図書	5	魚の感覚	末広恭雄	S46	H13	31
教育出版	3	広い言葉，せまい言葉	福沢周亮	S55	H22	31
教育出版	3	どちらが生たまごでしょう（H12-H22中断）		S55	継続	29
東京書籍	1	かみずもう		S46	H11	29
東京書籍	5	色さいとくらし		S46	H11	29
東京書籍	5	森林のおくりもの	富山和子	S61	H26	29
東京書籍	1	いろいろなふね		H４	継続	28
教育出版	3	めだか	杉浦宏	H４	継続	28
教育出版	3	くらしと絵文字	太田幸夫	H４	継続	28

5．説明的文章教材の題材の傾向

本節では，説明的文章教材で扱われている題材の傾向について検討する。考察にあたっては，各教材の内容に関わるキーワードを付し，そのキーワードを整理して，題材にかかわるカテゴリーを設定した。なお，各教材の叙述内容は様々な題材に関わることがあるため，複数のカテゴリーに属している教材もある。

S61版の３種（K社・N社・M社）の教科書教材を調査した森田は，各教科書の説明的文章の「内容」について，「⑴自然を認識の対象とした話題 ⑵生活・文化・社会を対象とした話題 ⑶言語を認識の対象とした話題」（K社），「⑴自然に学ぶ ⑵文化の継承と創造 ⑶成長の姿」（M社），「⑴自然の系列 ⑵文化の系列 ⑶社会（民族）の系列」（N社）といった文言を引いたうえで，「子どもたちがさまざまな事象の全体を捉える窓口として，「自然」，「文化」，「社会」を設定しているという共通点がある」としている[*5]。本稿のカテゴリーの設定にあたっては，これらの記述も参照した。【表５】は，採録が多かった題材と，それぞれの採録数の一覧である。

【表５　戦後小学校国語科教科書において採録が多かった題材と教材採録数】

題　材	動　物	植　物	環境問題	くらし	乗り物	遊　び	伝統文化	ことば	総　数
教材数	191	50	50	120	24	54	31	105	795
採録回数	517	132	135	295	74	119	86	224	1926

５．１　動植物

森田によるS61版の調査では，収集した72編中37編（51％）が「自然物および自然現象」を題材としており，「小学校段階で学習する説明的文章の内容（つまり小学生の認識の対象）として，自然に関するものが最も適切と考えられていると推測される」とされている[*6]。そこで，「自然」に関する題材を取り上げることとする。まず，「自然」に関する題材の中でも採録が多かった動植物について検討する。【表６】は動植物を題材とする説明的文章教材の採録回数である。

【表６　動植物を題材とする説明的文章教材の採録回数】

		S46	S49	S52	S55	S58	S61	H１	H４	H８	H12	H14	H17	H23	H27	計
動物	一年	8	9	7	9	8	8	9	8	8	8	7	6	8	9	112
	二年	8	8	8	7	7	8	10	8	7	8	8	8	6	7	108
	三年	6	6	9	9	9	11	12	11	9	9	10	7	8	7	123
	四年	7	7	6	8	8	7	8	7	6	6	6	5	5	6	92
	五年	2	2	5	4	4	3	3	3	3	2	4	4	2	2	43
	六年	1	1	5	4	3	4	3	3	6	5	1	1	1	1	39
	計	32	33	40	41	39	41	45	40	39	38	36	31	30	32	517
植物	一年	1	1	2	1	2	3	2	1	2	2	2	2	1	1	23
	二年	4	3	4	4	4	4	4	5	5	5	4	3	4	6	59
	三年	2	2	2						1	3					10
	四年	1	1		1	1	3	2	3	1	1	1			1	16
	五年	1	1	2	1	1	2	2	2	3	2		1			18
	六年				1	1	2	2								6
	計	9	8	10	8	9	14	12	11	12	13	7	6	5	8	132
教科書種数		5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	5	5	5	

動物を題材とする教材は，191編延べ517回の採録があった。全教材の24％，採録回数の27％であり，説明的文章全体のおよそ４分の１が動物を題材にしている。また，採録数の多少はあるが，全期間の全学年で動物を題材とする教材の採録があり，説明的文章教材で最も好まれている題材だといえる。学年別に見ると，相対的に高学年での採録が少なく，三年生以下での採録数が多い。【表７】は，題材とされている動物をさらに「鳥」「魚」「虫」「動物全般」に分けて集計したものである。様々な種が含まれる「動物全般」を除くと，「虫」に関する教材が

【表７　題材となる動物の分類】

	教材数	採録回数
動物	85	224
鳥	28	66
魚	29	102
虫	49	125
計	191	517

49編125回で最も多い。ちょう，あり，とんぼ，はち，くもなど，虫は児童が生活の中で出会うことが多く，特に取り上げられやすい題材であった。こうした動物を題材とする教材の採録については，学習者が親しみを持ちやすく，文章を読む動機付けを図りやすいことが，特に低学年で好まれる一因として考えられる。

植物を題材とする教材の採録は50編延べ132回で，動物に比べると少ないが，他の題材と比べると少なくない。動植物を合わせると教材全体の採録回数の33.7%が占められ，「自然」に関するものの中でも「動植物」が重視されていることは，全期間の調査からも裏打ちされる。植物に関する教材は，動物に比べて低学年に採録が偏っていることが特徴的である。「植物」に関する教材は，低学年では全期間にわたって採録があり，特に二年生で集中的に採られている。二年生では，40年を超える長期教材である「たんぽぽ」（二年・東書・S55-），「たんぽぽのちえ」（二年・光村・S46-）を代表として，「おおばこ」（一年・日書・H４-H16），「虫を食べるしょくぶつ」（一年・学図・S61-H13），「すみれとあり」（一年・教出・H12-）も10年以上にわたって継続採録されていた。一方，三年生以上での採録数は相対的に少なく，特にH17版以降ではほとんど採録されていない。後述するが，高学年で動植物を扱う場合は，環境問題など社会的な話題と関連させることが多くなる。そのとき，生態系の破壊や種の減少については植物より動物を取り上げることが多い。こうした状況もあり，植物に関する高学年教材は，近年は相対的に少なくなっている。

教材で説明される叙述内容をみると，中学年までは動植物の生態や構造について，問いを設定し解明するという構成で書かれた教材が多く採録されている。一方，高学年になると，後述する環境問題をはじめとして，他との関係の中で生きる動植物について論じる教材が多くなっている。動植物に関わる説明の内容は社会の影響を受けることが少ないため，差し替えなければならない要因が生じにくく，継続教材になりやすい。このように叙述内容が安定していることも，動植物が採録されやすい遠因であろう。

５．２　環境問題

「自然」に関わる題材で，平成になって採録数が増えているのが，環境問題である。地球温暖化，森林の減少，生態系の破壊など，地球環境が損なわれている現状を説き，自分たちの生活や考え方を問い直す教材は，動植物とは別系統の，「自然」を題材とする教材群である。ただし，環境問題に関する教材の中には生態系や種の減少を扱ったものもあり，動物を題材とする教材と重なるものもある。【表８】は環境問題を題材とする説明的文章の採録回数である。すべての期間にわたって50編135回の採録があるが，低学年での採録はなく，四年生以上，特に六年生での採録数が多い。身近な生活場面から離れた社会問題を扱っていること，事実に基づいて筆者の考えが示される論説文であり，高学年の指導事項である事実と意見との関係を捉えるのに適していることなどが，高学年での採録が多い理由として挙げられる。

【表８　環境問題を題材とする説明的文章教材の採録回数】

	S46	S49	S52	S55	S58	S61	H１	H４	H８	H12	H14	H17	H23	H27	計
一　年															0
二　年															0
三　年				1	1	1	1	1	1	1	1				8
四　年	1	1	2	1	1	3	6	5	4	4	2	1		1	32
五　年	2	3	3	1	1	1	2	2	3	3	4	3	3	2	33
六　年		1	4	4	4	4	5	10	9	6	5	4	3	3	62
計	3	5	9	7	7	9	14	18	17	14	12	8	6	6	135
教科種数	5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	5	5	5	

環境問題を題材とする教材は全期間で採られているが，昭和40年代は大気汚染や身の回りから生き物が減っているといった身近な話題を題材としていた。その後，伊藤和明「自然を守る」（六年・光村・S49-H３），小原秀雄「人間が砂ばくを作った」（六年・東書・S52-H７）など，人間による自然破壊を題材とする教材が登場し，身近な話題から離れた社会問題としての環境問題が扱われるようになる。これらの他に，土屋圭示「カブトガニ

（カブトガニを守る）」（四年・光村・S55-H12），富山和子「森林のおくり物」（五年・東書・S61-H23）など，採録回数が７回以上の長期にわたって継続採録された教材もある。特にＨ１版あたりから採録数自体も増え，高学年の代表的題材となっていく。ただし，平成初期に比べると，平成20年代以降は環境問題に触れる教材が減っている。環境問題へ向けられる社会の関心は減退していないが，近年の題材の多様化や教材減の中で，相対的には少なくなってきている。

５．３　くらし

学習者が日々の生活の中で触れる事物や事象に関する題材を「くらし」として分類した。【表９】はくらしを題材とする説明的文章の採録回数で，120編が延べ295回採録されている。学習者の関心や読みやすさを勘案すれば，くらしを題材とする教材が多くなるのは当然だろう。前述したように，採録教材の題材の柱として「生活」を設定している出版社もある。

【表９　くらしを題材とする説明的文章教材の採録回数】

	S46	S49	S52	S55	S58	S61	H１	H４	H８	H12	H14	H17	H23	H27	計
一　年	5	4	4	3	4	2	2	2	2	3	2	2	5	6	46
二　年	5	5	4	1	1	4	5	4	5	4	4	3	2	2	49
三　年	9	10	4	4	4	4	4	2	2	2	5	4	5	6	65
四　年	4	5	7	4	5	7	6	6	4	5	4	7	4	4	72
五　年	3	3	1	1	1	3	4	6	5	3	2	3			35
六　年	1	2	2	3	2	2	3	1	2	3	2	1	1	3	28
計	27	29	22	16	17	22	24	21	20	20	19	20	17	21	295
教科書種数	5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	5	5	5	

「くらし」に分類した教材の具体としては，各地の生活習慣（「雪のあるくらし」東書・四年・S52-H11），生活の中で使う道具（「くらしの中の丸い形」東書・五年・S61-H11），衣食住に関連する話題（「すがたをかえる大豆」光村・三年・H17-），街中の記号や標識（「あいずとしるし」（学図・二年・S45-），建造物（「はしの話」大書・二年・Ｈ１-H20），風習などの生活文化（「せかいのあいさつ」教出・二年・Ｈ８-H13）などがある。学習者の関心と結びつく多様な話題が幅広く取り上げられていて，他の題材と重なっている教材も少なくない。内容も，「あいさつ」といった「文化」から，「標識」のように社会生活に必要な事物まで，多岐にわたっている。出版社，採録時期もほぼ全般的に散らばっているが，高学年での採録が相対的には少ない。

長期教材は「あいずとしるし」（学図・三年），「はたらくじどう車」（教出・一年），「じどう車くらべ」（光村・一年）などがあるが，自然題材よりは少ない。生活環境の変化はめまぐるしく，自然題材と比べると時代の影響を受けやすいことも一因であろう。

５．４　乗り物・伝統文化

「環境問題」のように特定の学年に採録が集中する題材として，「乗り物」や「伝統文化」が挙げられる。【表10】は乗り物を題材とする教材，【表11】は伝統文化を題材とする教材の採録回数をまとめたものである。

乗り物を題材とする教材は24編が延べ74回採録されている。全期間で採録があるが，学年はほぼ一年生に集中し，五・六年生での採録はない。「はたらくじどう車」（教出・一年・S46-），「じどう車くらべ」（一年・光村・S52-）「いろいろなふね」（一年・東書・Ｈ４-）など，長期教材も多く，一年生の代表的題材だと言えよう。

乗り物は，児童の興味を引きやすく，くらしの中で出会うことも多いので考えやすい素材であることが，一年生教材として採られる一因である。また，「しごと」と「つくり」のように，目的や機能と構造を組みにして説明する文章構成で述べられており，動植物を題材とする教材の文章構成につなげやすい。また，いくつかの乗り物を列挙する構成で書かれている。一年生の学習事項である情報の整理や比較を学びやすい文章構成をとりやすいことも，一年生で採録される一因であろう。

我が国の伝統文化を取り上げて紹介する教材は31編が延べ86回採録されている。このうち，「ひなまつり」（一年・日書・S55-H14），「まめまき」（二年・日書・S55-Ｈ４），「子どもたちの祭り」（三年・東書・S61-Ｈ８）のような年中行事に関わる話題が低学年，特に三年生で集中して採られている。くらしに題材をとりながら，行事

【表10　乗り物を題材とする説明的文章教材の採録回数】

	S46	S49	S52	S55	S58	S61	H 1	H 4	H 8	H12	H14	H17	H23	H27	計
一　年	5	5	5	4	4	3	4	5	4	4	3	3	4	4	57
二　年	3	3	1	1	1										9
三　年	1	1	1								1	1			5
四　年	1	1										1			3
五　年															0
六　年															0
計	10	10	7	5	5	3	4	5	4	4	4	5	4	4	74
教科書種数	5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	5	5	5	

【表11　伝統文化を題材とする説明的文章教材の採録回数】

	S46	S49	S52	S55	S58	S61	H 1	H 4	H 8	H12	H14	H17	H23	H27	計
一　年				1	1	1	1	1	1	1	1				8
二　年				1	1	1	2	1	1						7
三　年	1	1	2	4	4	5	6	4	3	4	2	2			38
四　年			1				1	1					1	1	5
五　年		1		1	1	1						1	1	1	7
六　年	2	2	2	1	2	2	2	2	1			1	2	2	21
計	3	4	5	8	9	10	12	9	6	5	3	4	4	4	0
教科種数	5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	5	5	5	

や風習など,具体的な事物ではなく抽象性を伴う文化的な事象について読み取ることを求めるようになっている。一方，高学年では，「正倉院とシルクロード」(六年・東書・S52-H８)のような歴史的文化遺産に関わる題材や，現代に生きる伝統文化のよさを紹介する説明的文章が採られている。こうした教材はＨ４以降に減少しているが，H17版から高学年での採録が一定数見られるようになっている。

５．５　障がいを持つ方への配慮等

全体での採録数自体は多くないが，近年目にすることが多くなったのが，点字や手話などを扱う教材である。ユニバーサルデザインなど，誰もが安全で快適な生活を送れるライフスタイルに対する関心や意識が高まっており，説明的文章でもこうした題材が採られるようになっている。

視覚障害を持つ方への配慮に触れた教材としては，点字ブロックを紹介した「いろいろな道」(二年・教出・S46-S54）があるが，本格的な採録はＨ８版からになる。Ｈ８版に「もうどう犬のくんれん」(三年・東書・Ｈ８-）と点字を扱った「手と心で読む話」(四年・光村・Ｈ８-H22）が採録され，以後H14版では５編，H17版では４編と採録数が増えている。主に点字などのコミュニケーション手段についての説明が扱われており，H17版では手話を扱った教材が２編採録されている。環境問題と同様，平成に関心が高まった教材である。

６．まとめと今後の課題

本稿では，教材に叙述されている内容に着目して，戦後小学校国語科教科書における説明的文章教材の採録傾向を検討した。本稿の検討で確認できた教材の採録傾向として，次の点が挙げられる。

1　説明的文章教材の採録数は全般的に減少傾向で，特にＨ８版からの減少幅が大きい。ただし，H17版から微増に転じており，現状では一学年３～４編程度で安定している。学年別では，低学年では教材数は減っておらず，三年生以上，特に六年生の教材が減少している。

2　全教材の六割強が採録期間八年以下の短期採録で，教材全般として採録期間が短い。一方，採録期間が28年以上の長期教材は22編で，そのうち17編が三年生以下の教材であった。学年別にみると，一・二年生の差し替え数が相対的に少なく，高学年，特に六年生の教材は短期で差し替えられるものが多い。

3　採録教材の題材では，「動植物」，特に「昆虫」を扱った教材が最も多く採られている。動植物を扱った教材は全学年で採録があるが，相対的には低学年で好まれている。一方，環境問題を扱った教材は平成に入る頃から高学年で採録数が増えたが，H20年代では減少している。動植物に次いで採録が多い題材は，児童が「くらし」の中で触れる様々な事象を題材にした教材である。くらしに関わる教材の長期採録は自然題材に比べると少なく，時代の影響を受けやすい。学年別では，乗り物を題材とする教材は一年生で，祭りなどの伝統文化を題材とする教材は三年生で，文化的事物や環境問題を題材とする教材は六年生で採録が多くなる傾向がある。また，平成半ばから点字や手話など，障がいを持つ方へとのコミュニケーション手段を扱った教材が採録されるようになっている。

本稿では題材についての傾向を中心に採録傾向を検討したが，説明的文章の学習内容は，文章の書きぶりや文章に表れる論理的思考を学ぶことにある。そうした文章の実態についての検討は，今後の課題としたい。また，題材傾向の変化と社会状況との関連についても検討が十分でない。合わせて課題としたい。

【謝辞】

本研究は，JSPS 科研費 JP18K02534の助成による研究成果の一部である。教材の調査にあたっては，教科書研究センター附属教科書図書館に多大な便宜を図っていただいた。また，教材目録の作成にあたっては，伊藤裕紀，久米宏樹，森惇仁，服部良介，矢部育実各氏に協力をいただいた。記して，御礼申し上げる。

【文献】

幾田伸司「小学校国語教科書の編修様式の変遷」，『国語教育研究』(広島大学教育学部国語教育会)，58号，2017年，pp. 45-54

森田信義『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』，明治図書，1989年

森田信義「説明的文章教育の研究」，『新訂国語科教育学の基礎』．溪水社，2010年，pp. 128-181

【注】

* 1　森田信義「説明的文章教育の研究」，『新訂国語科教育学の基礎』，2010年，溪水社，pp. 128-129
* 2　以下の考察においては，出版社は略称（日書・東書・大書・学図・三省・教出・光村）で，教科書の記載は刊行年度で示す。たとえば「S46版日書」は，昭和46年度に刊行された日本書籍の教科書を表す。また，同じ学習指導要領に準拠する教科書が刊行された期間は，刊行初年度を挙げて「S46期」とする。
* 3　説明的文章教材は他社との重複がないため，各年度での教材数は教材採録回数と同じ数になっている。なお，複数学年で採録された５編は同一教材として扱った。
* 4　森田信義『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』，明治図書，1989, p. 213
* 5　森田，前掲書，pp. 190-193
* 6　森田，前掲書，p. 193

Changes of Expository Texts in Japanese Textbooks used at Elementary School during 1971-2019

IKUTA Shinji

A purpose of this paper is to clarify a tendency of the expository texts in Japanese textbooks used at elementary school during 1971-2019. And, through the learning of the expository texts, I clarify that what kind of information and sense of value given to children.

The tendency of the expository texts in textbooks is:

1. The number of expository texts decreases generally, and it decreases a lot in particular after 1996. In grades, the number of expository texts decreases by more than third grader, particularly sixth grader.
2. As for the explanation, a transcription period is short generally. In particular, many texts of the sixth grader have replaced for a short term.
3. The subject of texts has most “animal” and “plant”, particularly “insects”. Texts about the environmental problems increase in the upper grades from around 1989. There are many texts that described various things which a child touches in “living”. Otherwise, there are many texts about “vehicle” in first grader, about “the traditional culture” in third grader, and about “the cultural things” and “environmental problem” in sixth graders. After 2005, texts about “Braille” and “the sign language” come to be transcribed.